

四六

今古  
家堂

公羽

草

三

中  
村  
文  
全





今古奇談公卿草卷之三

崑崙崙崙



往昔南小朝と分ちまふ干戈を揮ひ雌雄と  
争ふ時奥羽小島屋の舊臣一品駿河守俊景  
崔備前守行貞とまゝへ強勇才畧二才たり  
方里勝つかく一双方良士あり中絶言殿軍と  
出し足利と征しある時へ友人國ふりて正し  
く政務内執りい名權を運送しある心を合  
ちく終内と絶つ根本と固うし中絶を  
度の武威寝熾る崔俊景ちが嫡男にた馬を

翁草

三十一

行茂とある者あり年々と強冠とあると容範  
兼いてんげぬえんて詩をたふふ  
よせ花ふり一月は嘯とあると稀なる風  
乃ある者あり強にち強いつるありて救日  
「このも居るもこのも居る」父の命と信  
彼が屋敷へあり強河守小對面病作とある  
父の致意と傳ふと強河守も意志と謝し僕も  
妻はは少く候後の方まで御枕前離る  
ふ代得とあると一臺とあると救日の様子を  
うとあると酒者とあると様々容範とある



おつゝあまの座興うわてもう侍女を梅枝の  
整うを縁のわめよりおきてけんしするを後  
にちゆとつをく拓きこまははたよりあつし  
那れをけりかくし秋の夜もあけりゆき下  
も風雅のふひぬきまを酌し無を助へ  
く意をたれりてなりた馬ふもまごころ  
あくもとぬじりるまはつてく容貌とか  
くむらふまをに秋の清れあふ育めり芙蓉の  
家と常より移したるをきく是を頼みんを  
うたふまをと強ひるが面あを慌て蕭然と感極

とあふげ梅枝の玉腰よるに梅枝をけり中流  
ふ及びんとすうまの杯と地をく時をまた過  
の来傍客を癒れ癒るを癒いふすんべ酩酊と酔  
しうまのまをく強ひるまをく又教ををわすけ  
目よふ役をるに宴終りてく恋ふれ附く別を  
告ぐゆんんとすまへ病中るまへ失禮とゆい  
あふて次の間をくまをくお困るに暇あつむま  
おく訪ひまうと云つたの侍女は福をくせ  
あふまをく送るまをくたふまへ梅をくを  
おひのつてまをく振るまをくあふ女は顔と



まじむばらねども同いひも立てずるを  
よるなれと細い織辛とや二つの指と立三つ  
返一又懐中より小さき愛する種とぬけてあ  
一能取取しとるといひてふ余の詞うた  
とぬらまじりあふうと驕何ちが振子と父は  
里我初屋は座して只恨めと神迷ひを奪れ  
くあつとあつとく寝食を忘るゝむらさ  
と詩を吟じて曰

絶世奇花玄圃限一枝濃艶媚人開  
悠悠仙路空惆悵凡骨何時攀得回

た衣をづめの袖とてを脱けあつる力一時  
又あふくくくはる露を露とて使氣をね  
あ堂あつた馬と今常になつてあつた馬と今  
むま教あふ沈思するにあつた馬と今  
儂くくあつた馬と今常になつた馬と今  
いとくくくくくくくくくくくくくくくく  
ま所はとけうけうけうけうけうけうけう  
生の夢と謝せんものゝ家あつた馬と今  
とあつた馬と今常になつた馬と今  
つふ山嵐命をあつた馬と今常になつた馬と今



今更うかどけうてつて人きんと余依きつて  
漸く具よこを告ぐ器を清き物なりと  
よと苦しめあつてさうに宜しく謀ひ事をもん  
とつたるを又主候一廻り所を尋ねば是  
れを解し易し驢河をが屋敷は婢女は房屋  
を別よ志しつゝ同様に人をもちりて置方  
を候とけ門を結て男女の別と云く口と  
あて申すおどろきの物と云うハ第三の房屋  
ありと云ふありこそいふと云ふハ二又すま  
後と候ハは月乃のやうにこそ候君れ思ひま

んといひ候とておどろき候ふと云ふ候ひ  
おもて候ふ入て計策ハかたやと云ふは  
おもて候ふと云ふと云ふと候ふと云ふ  
おもて一品が室に候ふと云ふと云ふ  
入事と候ふ入て候ふと云ふと云ふ  
候ふと云ふ候ふに候ふと云ふと云ふ  
候ふと云ふ候ふに候ふと云ふと云ふ  
のわい今夕も小君が為小抱候えんとて  
携て死が如く表はあつて食頃ゆて立  
己小斃と云う今ハ圓小はつて候ふと云ふ



乃んでたふふと一擧よまれお茶をくち擧ぐと成る  
ふと脊ふ肩の驢河ちぐ門前此大なる堀の五車  
通るふにぬれん屋根と供ひ堀とこゆるふりも者  
すくくぬれぬるふにぬれぬとてさうさう  
腐屋のおふさう細い足な果して第三の腐屋  
腐屋にぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ  
侍従さうさうさうさう

整うぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ  
吟嘯するふにぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ  
然るにぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ







入まば女々ふ思ひそぐく度成てかじひ  
もとね誘うくよふ拓に良君の頼頼なる必  
あつんとて思ひかゝるふ先の目もどく  
あつたもけ飯の守り教くそは容易思ひ  
あつた成難くと案どふ必何かりか  
あつたあつたやと乃に岩端を清く  
くくくくくくくくくくくくくくく  
衆と吸入衆ふ芳と謝し親ふ登る酒を  
飲く又なるくくくくくくくくく  
人買ふに勿くくくくくくくくく































多しやとむをば持井も刀とかさる旅人  
 妖怪よあがず我家の婢はらうひるまは犬は  
 犬は妖怪我は飛とあえんとて懸る殺せれ  
 る是れも死にすくとも官家はゆるさべし  
 死にぞく死に飛越るべし多死難と強し  
 重身とのぐり計とさんとて浮小奥庭の飛  
 石の下にうく埋む重なる体りて居るしは  
 殺さる婢の親は伏見きて往來の旅人  
 あり薬店とりつけ薬のおいと強固て世を  
 者なりし小翌日初れあうある旅人は店小



て橋井が婢と殺しつゝとを濡るやれど亭主お  
いられた娘も主醫師よ申云すこばすをうぐ  
主殺さるゝ女ハ何雪のちめやひまをさといひて  
中へもなば出生ハ伏見れまゐるゝ死骸と  
奥庭の飛石の下に隠し置るゝゝゝとて  
さても極くそとそゝゝゝ一さんハ橋井が家へ来  
り膳も只案内をいふ用事のみとす娘  
は逢せ下さるゝ云けぬ唯今お人きひ  
おもふゆゝハ違ひるべし又さのて来らるべし  
五言とて橋井下男ハ耳く髪けのやれど

いふさづろくけさる用事さる娘ゆり中を  
お侍さんと膳も只膳け居てすたと人き  
濡る奥庭へり雪のてく死骸と埋め置るや  
こそとさと見せべしつれ飛石よかく血汐の  
こぼさる泣ありさる想身れ力を出し終はを  
尺中られ石きけさるやうくみまのさる下  
みも血汐まきたまう有るやう更橋井立出  
け侍さんく極ハ婢と殺すゆとをり知りた  
中へ面も土のゆく又ハ思ひをく何地へりとも  
迎けて身を濡さんとあふと彼宮河へおるバ















天保七年

四月吉日 武藏往々

福田伊三郎主